

# 中等社会科の目標とその具体化

——ホルト社会科第2版の場合——

金子 邦 秀

## I はじめに

中等社会科においては、わが国でも、知識の教授がその中心的な目標とされている。しかもその知識は十分な吟味がなされていない。したがって、適応力・転移力の小さな事実的知識、価値観・態度・技能と一体となった事実的知識が、一般的には教授されている。これに対して、事実的知識と概念的知識とを明確に区別し、適応力・転移力の大きな概念を教えるために事実的知識を選択するという転回が提唱されたのは、最近のことである<sup>(1)</sup>。

しかし、知識だけが社会科の授業で教授されているわけではなく、価値観、態度、技能も教授されている。社会科を知識教授の営みに限定することは、研究上の方法論としては認められることであろうし、転回といった成果も生み出している。だが、そこで教授される知識は、やはり、価値観、態度、技能と関連を持ってくる。中等社会科では、これらに対しては今まで十分な考慮が払われてこなかった。価値観、態度、技能を正面から取り上げ、それらを育成していくという点から、社会科の授業を考えていくべき時がきているのではあるまいか。

本小論では、以上の問題意識から、ホルト社会科第2版<sup>(2)</sup>を分析することによって、

- ①中等社会科における（特に知識以外の）目標と、シーケンス、コース、単元、授業、など各レベルへのその具体化の方策を明らかにすること、
  - ②その目標に基づいた単元や授業の構成のしかたを明らかにすること、
- を主たる研究目的としている。そして、この研究は、わが国の中等社会科を考えていく上で、手がかりを与えてくれると、私は考えている。

## II ホルト社会科の目標

ホルト社会科第1版では、目標は、学習態度目標、知識目標、探究目標が全ての授業に一樣に配置されていた。第2版では、後述する如く、学習態度目標、自己概念目標、価値目標、学習技能目標、探究技能目標、知識目標の6つに目標が分けられ、各授業ではそのうち2ないし6が示されている。

ホルト社会科の全体としての目的は、「それぞれの生徒の能力を十分に発達させて独立した思考者、民主主義社会の責任を果たしうる市民、にならせることを助けることである」<sup>(9)</sup>としている。しかし、これでは余りにも広範で抽象的であるとして、先の6つの目標に分けて示された。

知識爆発といわれる現代にあっては、生徒たちは学校を卒業してからも学び続けようとする意欲と、どのようにして独り立ちして学習していくかを知らなくてはならない。そこで、ホルト社会科では、「学習に対する建設的態度」を第1の目標としている。それらは、「課程内の作業に喜んで参加し、教育に積極的な価値をおき、外部の権威者のことばを信ずるよりも真実の検証としての組織的な探究のほうを明らかに好んでいることを示す、生徒を育成しようとしている」<sup>(10)</sup>。

青年期にあるハイ・スクールの生徒たちは感情を抑圧されたり自尊心を

傷つけられたりすることが多い。これに加えて「人種のるつぼ」と呼ばれるアメリカ社会にあっては、少数者集団に属する者が、彼らに対して長く差別をしてきた社会の中で平等な地位を見つけようとする時、彼らは「消極的な自己概念」に悩むことが多い。そこで、ホルト社会科は、次のようなイメージを生徒に形成させることによって「積極的な自己概念の成長」を目指している。

1. 私は賢い。
2. 私は独立して学習できる。
3. 私は自分自身で決定ができる。
4. 他の人々は私の意見を尊重する。
5. 授業においてであれ仕事に就いたのであれ、私はハイ・スクール以上の私の教育を続けることができる。
6. 私は、社会、国家、そして人類の、参加し、生産的で、価値ある一員である。
7. 私は私の価値観が何であるか知っているし、私の生活様式に対するそれらの意味を認めている。

第3に、ホルト社会科は、「諸価値の明確化」を目指している。すなわち「特定の一連の価値観を生徒たちに教え込もうとしているのでもないし、前もって決定された価値体系から論理的にもたらされる、個人としての、公的政策への彼らの支持を懇請するものでもない。そのかわりにこのカリキュラムは絶えず生徒たちに彼ら自身の価値観を明確化することを要求しているのである。」<sup>6)</sup>

第4に、ホルト社会科は、「学習技能の発達」を目標としている。中等学校の生徒は初等の学校で学習技能を学んできているはずであるが、実際のところ、それらを習得していない生徒が多い。知識爆発の時代にあっては、生徒は学習に対する積極的な意欲とともに、その意欲を実現しうる学

習技能を習得していなければならない。そうした時、たとえば、「グラフ、図、そして表を読む」というようないくつかの技能は、政治学、経済学、そして行動科学において重要な役割を果たす。というのは、これらの学問は莫大な量の統計的な資料を利用しているから」<sup>(6)</sup>である。

第5に、「分析的探究技能を用いる能力の成長」があげられている。この目標は、ホルト社会科で最も重要視されているものである。分析的探究技能は、実験、事例研究、世論調査、歴史家が一般化をなす方法、そして公的政策について一般化をなす方法などがある。これに加えて、歴史学習に特に適用できる2つの型、歴史的な時代や話題と歴史的な定義があげられている。

第6に、「知識の獲得」があげられる。教えられる知識の選択は、広義の歴史（従って社会といってもよい）の学習にとって必要な概念を学ぶのを助け、アメリカ社会における青年の関心と必要に適し、現代の政治的、経済的、および社会的問題についての適切な知識を与え、現在と過去の社会についての知識を与える、という4つの基準に基づいてなされる、としている。

### III ホルト社会科のシーケンスと目標

#### 〔シーケンスと目標の量的変化〕

ホルト社会科は、

第9学年1学期「比較政治システム」(Comparative Political Systems, C.P.S. と以下で略称)

第9学年2学期「比較経済システム」(Comparative Economic Systems, C.E.S. と以下で略称)

第10学年1学期「西洋社会の形成」(The Shaping of Western Society,

S.W.S. と以下で略称)

第10学年 2 学期「4つの社会における伝統と変化」(Tradition and Change in Four Societies, T.C.F.S. と以下で略称)

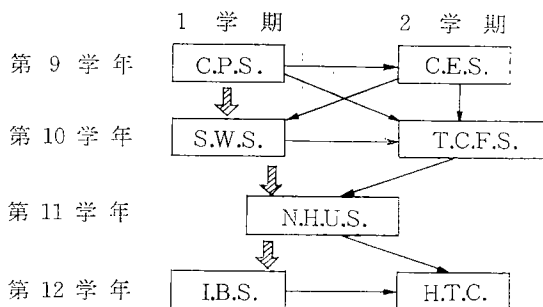
第11学年「新合衆国史」(A New History of the United States, N.H.U.S. と以下で略称)

第12学年 1 学期「行動科学入門」(Introduction to the Behavioral Sciences, I.B.S. と以下で略称)

第12学年 2 学期「3つの都市における人文科学」(The Humanities in Three Cities, H.T.C. と以下で略称)

というシーケンスをとっている<sup>(a)</sup>。

これを構造化して示すと次のようになる。



本小論では、矢印⇒で示した、 $\boxed{\text{C.P.S.}} \xrightarrow{(a) (1)} \boxed{\text{S.W.S.}} \xrightarrow{(a) (2)} \boxed{\text{N.H.U.S.}} \xrightarrow{(a) (4)} \boxed{\text{I.B.S.}}$  に注目して、分析を進めていくことにしたい。

別表①から④は、この4コースの目標の分布を示したものである。表の凡例にもある通り、Aは「学習に対する態度を発展させる」目標(学習態度目標と略称、以下同様)、Sは「積極的な自己概念を発達させる」目標(自己概念目標)、VはC.P.S.では「価値を明確にする」目標、それ以

表1 Comparative Political Systems の目標

単元	1								2								3							
章	1				2				3				4				5		6					
課	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
目 標	1	A A	A A	A A	L	K K	K K	K K	K K	K K	L	L	S	K K	L L	K K	K K	L	L L	V	V	K K	K K	
	2	K	K	K	K K	L	L L	L	L	L	K	K	L L	A	K K	L	A	K K	K K	K K	K K	L	V	
	3	L	L	L	A	A	A			A	A	K	L L	A		L			L	L	V	L		
単元	4																							
章	7											8											9	
課	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44		
目 標	1	K K	K K	K K	K	L L	K K	K K	K K	V	K K	K K	K K	L	K K	K K	K K	L	K K	I I	I I	I I		
	2	L	L	L L	L	S	L	L	L	K	L	L L	L	K K	L	L	L L	K K	L	K K	S	K K	S	
	3	A	A	V	V	K K	V	V	V	L	V	A A	V	A	V	V		A	A	V	K	S	K	
単元	5											6												
章												10												
課	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61							
目 標	1	L	V	K K	K K	I I	K	K	K K	S	V	V	L L	V V	V	V	V							
	2	K	K K	A	I I	K	A	A	V	L	L L	L L	A	L	L	L	L							
	3	V	I I	V	V	V	V	V	L	K K	K	K	K K	K	K K	K K	A	K						

凡例

- A=Developing attitude toward learning
- S=Developing a positive self-concept
- V=Valuing (C.P.S. は, Clarifying value)
- L=Developing learning skills
- I=Developing inquiry skills
- K=Knowledge goal

表2 The Shaping of Western Society の目標

章	序					1				2				3				4							
課	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13 <sup>a</sup>	13 <sup>b</sup>	14	15	16	17	18	19	20	21			
目 標	1	A A	A A	K	L L	L	K	V	I I	K K	K K	I I	I I	K	I I	S	S	V	K K	I	K K	K K	K K		
	2	K K	L L	V	K K	K	A	A A	K K	I	I I	K	K K	I I	L	I I	K K	K K	I I	L	A A	L	V		
	3	L	K K	L	V	A	V	K K	V	L L	A A	L	V	L	K	K K	I	L	L L	K K	I	I	S		
	4							L L		L	A														
章	5					6				7				8				9				10			
課	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43			
目 標	1	K K	I I	I I	K K	L	I I	I I	K K	I I	K K	K K	K K	K K	K K	I	K K	K K	K K	K K	K K	I I			
	2	I I	L	K K	I I	I I	K K	K K	I I	K K	L L	I I	I	I	I	I	K	I	I I	I	I	K K			
	3	L	K K	V	V	K K	A A	L L	V	V	I I	S	L	L	L	V	V	K K	A A	L L	L L	V	S		
	4														A										
章	11					12				13				14				15							
課	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65			
目 標	1	I	V	I	I	I	L	K K	I I	I I	K K	I I	K K	K K	K K	K K	K K	K K	K K	L L	K K	I			
	2	S	K	V	S	A A	I	I	K K	K K	I I	K K	I	I	I	I	I	I	A A	S S	I	L			
	3	V	L L	K K	K K	K K	K K	A	L	A	L	V V	V V	V	L	L	S	V V	L	L L	K K	L	A		
	4	K K							A						A	A									





章	17						18					19					20				21			22			
課	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87					
目	1	K K	K K	K K	K K	K K	K K	L	V	K K K	K K	K	V	V	K K	K K	V	S	K K	K K	A	A					
	2	L	A	I	I	V	I	I	I	K	I	I	I	A	L	L	L	I	I	I	I	S	K K				
	3	V	I	V	A	I I	S	A	K K	I	A	S	V	L	I	V	S	K K	K K	A	V	I I	I I				
標	4				V	S		V	V	L		V		K K	K			V		L	K						
	5																										
	6																										
章	23					24				25				26				27									
課	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	104	105	106							
目	1	I	I	I	L	I	I I	A A	K K	A	L	K	K K	K K	K K	V	K K	L	S	K K	L						
	2	L	A A	K K	I I	K K	K K	I	L L	I I	K	A	I	I	I	K K	L	K	A	I	I						
	3	S	K K	S	K K	V	V	K K		K K	I	L	V	L	V	I I	A	A	L L L	L	K K						
標	4		V	V						S	V	V		A	S		I	S	K		V						
	5																										
	6																										

外のコースでは「価値づけ」目標（両者を合わせて価値目標と略称）、Lは「学習技能を発達させる」目標（学習技能目標）、Iは「探究技能を発達させる目標」（探究技能目標）、Kは「知識目標」を、それぞれ示している。

そして表に「AA」とあり、それが目標1の欄であるならば、その課では2つの学習態度目標が第1の目標として述べられていることを示している。

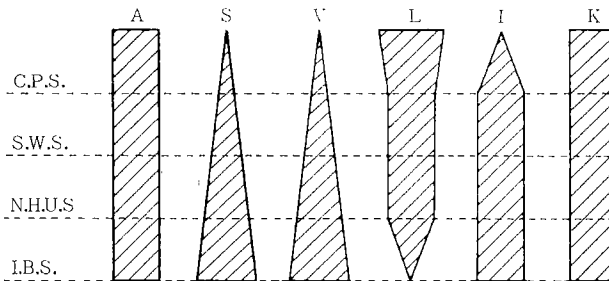
表1から表4までを概観してみると次のようなことが言える。学習態度目標(A)は、4つのコース共一貫して分布している。自己概念目標(S)は学年毎に相対増を示している。学習技能目標(L)は、C.P.S.で目立

表4 Introduction to the Behavioral Sciences の目標

章	1								2								3						
課	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
目 標	1	A	L	L	K K	K K	A	A	K	K K	V	K	K	K	K K	K K	K K	L L	K K	K	V	K K	K
	2	K K	A	K K	S	I	K K	L	I	I	K K	V	I	V	L	I	I	V	L L	V	S	I	V V
	3	I	K K	I	I	V	I	K K K			I				V	V	L		V	L	K	A	A
	4																						
章	4										5								6				
課	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	
目 標	1	K K	K	K K	K	K K	K	K K	K	K K	K K	K K	K K	A	K K	K	K K	K K	L	I	K	K	K
	2	L	I I	V	V	L	L	L	L	I	V	L	L L	K	V	I	L L L	L L	S	K	I	V	V
	3			A	A	A	I	A	V	S	A	A	I	V	S	A		V		V	A	S	S
	4			L			V		S		L					V							
章	7																						
課	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54													
目 標	1	A	L	A	K K	K K	K	K	K K	K K	A												
	2	K	K	K	V	V	A	V	V	L	I												
	3	V		V	L		L	A	A	V	V												
	4						V																

ち、S.W.S., N.H.U.S. ではそれよりは少ないが一貫して見られ、I.B.S. では減少する。探究技能目標は、C.P.S. ではわずかであるが、他の3コースでは一貫して見られる。知識目標(K)は、4コース共一貫して見られる。

以上を整理してみると、次の図のようになる。



### 〔シーケンスと目標の質的变化〕

ホルト社会科の6つの目標は、第9学年から第12学年まで、どのように変化しているのか。その質的な深化を見ていきたい。

#### 1. 学習態度目標(A)

まず、学習態度目標を考察してみたい。C.P.S. では次のようなプロセスで、「小集団の形成」が目指される。

①他人の話(フィルムストリップなど)を聞くこと(1-4, 1章4課の意, 以下同じ)

②小集団に参加すること, 報告すること(2-6, 4-16, 6-23)

③小集団での仕事のなかから1人の生徒の仕事として目立つものを選ぶ(3-10)〈個人-集団〉

④レポーターを選び彼を助ける(3-14)

⑤小集団の中で喜んで協力的に働く(6-24)

⑥小集団の中で建設的に働く(8-33, 8-35, 10-50)

⑦小集団でレポートを出す(8-35)

⑧クラスの仲間からの口頭のレポートを注意して喜んで聞く(10-51)

⑨小さな討論集団の一員として自分の分類システムなどを喜んで討論する(11-56)

なお、③からはもう1つの方向に発展していく、④'=④「喜んで自分の価値を明らかにする」(3-13)が派生している。

次に S. W. S. では、C. P. S. から引き続いて「小集団の形成」のうち第⑥段階(序-1, 1-7, 2-10, 4-19, 2-51, 12-52, 13-57, 15-62)と第⑦段階(2-10, 7-27)が学習態度目標として、特に強調される。

それと同時に、新たに、C. P. S. の「④喜んで自分の価値を明らかにする」から始まる「小集団の中での個の育成」が次の如く目標として展開される。

①一組の客観的な基準によって自分自身の仕事を喜んで評価すること(序-5)

②あることが自分自身の生活にとって適しているかどうかについての感情を明らかにする(1-7)

③仲間の生徒によって表明された考えを注意して聞く(4-19)

④小集団のメンバーとして作業する時に役立つ情報を貢献する(8-36)

また、S. W. S. では「クラスとしての学習」のための目標も、わずかであるが次のものが取り上げられている。

⑤教室での練習として1つのワークシートを完成する(9-39, 15-62)

⑥このワークシートに関連したクラス討論に対して役立つ情報を喜んで貢献する(9-39, 12-50, 13-56)

⑦教室での課題の部分としての書き方練習に参加する(9-39, 15-65)

## ⑤喜んでクラス討論に参加する (12—52)

N. H. U. S. では、個人レベルでは「探究を支える態度」の育成に重点が置かれ、「小集団の形成」の第⑥段階 (4—13, 9—32, 12—47, 13—50, 14—52, 15—57, 17—65, 20—78, 22—86, 23—89, 24—94) と第⑦段階 (4—13, 17—65) も引き続き目標とされている。

「探究を支える学習態度」というのは、たとえば、「喜んで新しい証拠に照らして仮説を改め付加的な仮説を発達させる」(10—37)、「1つ以上の準拠枠を使って1つのトピックに喜んでアプローチする」(12—47)、等々である。これらの目標は、後述する探究目標と直接に関連を持ち、かつ、それを支えるものとなっている。

I. B. S. では個人と個人、個人と小集団、個人とクラス、といった「相互関係の中で必要とされる学習態度」が目標とされている。

個人と個人の相互関係の学習態度目標は、「仲間の生徒によって表明された考えを注意して聞く」(4—25, 4—32)、といったものである。個人と小集団のそれは、「小集団の一員として仕事をする時、役立つ情報を貢献しようとする」(3—22, 4—26)、といったものである。個人とクラスのそれは、「喜んでクラス討論に役立つ情報を貢献しようとする」(3—21, 4—27, 4—28, 5—33, 5—35, 6—42, 7—52)、といったものである。そして個人と小集団とクラスを包摂する「喜んで小集団の討論に参加しそれをより大きな集団に報告し返す」(6—45, 7—50, 7—51) という学習態度目標に到達する。最終学年にあたる I. B. S. では、以上の如く、各学年の各コースで発達させられてきた学習態度を関連させ総合していくことが目指されている。

## 2. 自己概念目標 (S)

自己概念は、本来全ての教授・学習活動で、その育成がはかられるべき

性格を持つ。しかし、各課の目標を明確化するとすると、自己概念目標は、限られた課においてのみ目標とされることになる。

C. P. S. の代表的な自己概念目標は「(○点＝筆者)、「合衆国における政治のプロセスに影響を及ぼす自分自身の能力を知るようになること」(9—42)、「私は政治システムの活動的な参加者になり得るし、同時に数多くの非政治的な興味を追求できる、と言うことができること」(11—53)である。

S. W. S. では、それらは、「歴史的な証拠から仮説を公式化する自分の能力に自信を持ち始めること」(3—14)や「小集団の一員として作業する時、役立つ情報を貢献できると感じること」(10—43)である。

N. H. U. S. では、「歴史の探究において使用するための質問をデザインする自分の能力に自信を持ち始めること」(2—6)である。

I. B. S. では、「価値論争に関する自分の個人的な意見は重要であるということを認識し始めること」(3—20, 4—30, 5—36, 6—44), である。

これらを見ると、自己概念目標は、自分の能力を知り、それに自信を持って貢献し、それを通じて個人的な意見は重要なのだということを、生徒たちに認識させていくことを目指している。また、この深化のレベルがほぼそれぞれのコースの目標として具体化されている。

### 3. 価値目標 (V)

価値目標は、C. P. S. では「価値を明らかにする」目標、それ以外のコースは「価値づけ」目標となっている。

価値目標の具体的な事例は次節で述べるので、C. P. S. のそれのみを示し、それ以外のコースについては一般化して述べよう。

C. P. S. では、たとえば、「社会的背景と政治上の役割の関連について

の「感覚を明らかにする」(7-26) ことや「民主的社会の維持のためのパワー・エリートの意味を考え始める」(7-39) となっている。このコースでは、価値に間接的にアプローチするために価値を伴う社会事象に関して「感覚を明らかに」したり、「考え始め」たりすることに重点が置かれる。

次に、S.W.S. では、C.P.S. の2つの段階に、さらに、「価値を検討」したり、「1つの立場を採り、その立場を検討する」段階が加わる。

N.H.U.S. では、S.W.S. を引き継ぎ、価値を「明らかにし、考え、検討し始めること」が繰り返し繰り返し各課で目標とされる。

I.B.S. では、以上のことを踏まえて、「～についての自分の価値を明らかにする」ことや「～に対する自分の態度を検討する」ことが目標とされる。

このように、「価値づけ」目標の段階は、大きく、一般的価値について明確化→熟考→検討するサイクルと、それが十分繰り返され生徒に習得されたのちに、生徒が自分の価値について同じサイクルを適用して検討すると、2つのレベルに分けることができる。

#### 4. 学習技能目標(L)

ホルト社会科で、学年を問わず目標とされているのが、学習技能目標である。学習技能目標は、学習態度目標、価値目標、後述する探究技能目標と密接な関連を持ち、学年による深化はあまり見られず、それぞれの授業の単元内での位置づけ、単元のコース内での位置づけ、などに応じて掲げられている。

学習技能には、

①～からデータ(情報)を収集できる、(～=有声フィルムストリップ、新聞記事、図表、伝記、レコード、地図、等々)

- ②そのデータを～に転換できる, (棒グラフ, パイ図表, 等々)
- ③Aのデータ(情報)をBのデータ(情報)と比較できる, (絵と散文の文章, 現代の女性改革者と南北戦争前の女性改革者, 等々)
- ④一次資料から推論できる,
- ⑤一次資料を解釈できる,
- ⑥探究技能に関連した学習技能を駆使できる,
- ⑦成果を口頭ないし書かれたレポートにする, などがある。

教科書にしても各種の抜粋やデータから成る資料集であるホルト社会科では, それらを十分に活用することが, 学習技能目標の主要な焦点となっている。

## 5. 探究技能目標 (I)

ホルト社会科で最も重要視されているものがこの探究技能目標である。

C. P. S. では, 「付加的な探究の型」と呼ばれ, 型としては5つの段階から成るものが, 目標としては,

- ①資料を与えられて問題を認識する,
- ②問題に対する何らかの解決を認識する,
- ③その解決の論理的帰結を演繹できる,

の3段階が1.セットとなって, 5章のいくつかの課で示されている。

S. W. S. で強調されているのは, 次のN. H. U. S. と共に, 「歴史のための探究の型」であり, 「歴史家が一般化をなす技術」とも呼ばれるものである。第1版では, 1つの単元をこの型に基づいて構成していたが, 第2版では, 各単元は, その型のどこかの段階に重点化され, 1つの単元でこの型を完結的に習得させようとする事はなくなった。

S. W. S. では, それらは,  
\*を与えられて,



- ① { 分析的質問を尋ねる,  
 仮説を述べる,
- ②一般化を述べる (8~15章),
- ③評価を加える (12章),  
 となっている。

N. H. U. S. では、それらは、  
 $x$ と $y$ を与えられて、

- ① { 分析的質問を尋ねる,  
 仮説を述べる,
- ②仮説を検討する,
- ③仮説を正当化ないし修正するために証拠を選択し評価する (8章),
- ④新しい仮説を立てる (12章~),
- ⑤評価を加える (19章),

となっており、条件が S. W. S. にくらべて2つになり、より複雑な探究がなされる。つまり、探究技能目標は、1つの段階は1つの単元に対応する目標として、その育成が目指されている。

I. B. S. では、それ以前のコースを基礎にして、④仮説を立てること、⑤探究方法の批判的検討をすること、そして⑥新しい探究方法の提起が、探究技能目標とされる。各単元は、④、⑤、⑥のいずれか1つを、その単元を構成するものになる目標として掲げている。

## 6. 知識目標 (K)

C.P.S., S.W.S., N.H. U. S., および I. B. S. の各コースは、それぞれのスコープに応じた知識を目標としている。それらは「~を知ること」と到達目標として示されている。

#### IV 目標と単元計画あるいは授業計画の事例

ここでは、ホルト社会科第2版の目標について、事例研究的に考察をすすめていきたい。

〔事例1. 全ての目標を目指す授業——N. H. U. S. 12章45課「John Brown：歴史的探究の練習」〕

この授業「John Brown：歴史的探究の練習」<sup>109,110</sup>は、N. H. U. S. の12章「南北戦争と再統合」の中の1課であるが、副題にもある通り、歴史的な探究を数日間を費して生徒に行わせる。

他の事例は、紙数の関係もあってその課の目標の全ては示せないので、この課だけはその目標全部を示してから考察したい。

I. John Brown についての証拠を与えられて、彼がそうであったような種類の人間について、そしてアメリカ史における彼の役割について、仮説を立てること。

A. 1つの特別な準拠枠を喜んで採用すること。

L. ④歴史的な資料の準拠枠を定義できること。⑤特別な準拠枠からの証拠を収集し評価できること。⑥論議の間あるいは論文の中で1つの視点を支持できること。

S. 論争上の人物について結論を引き出す自分の能力への信頼を発達させ始めること。

V. 自分が道徳的に間違っていると考えている実践を他人に思いとどまらせようとするにおいて、正当化されうる活動の種類について、自分の

考えを明らかにし始めること。

K. ㉔ John Brown は、奴隷を自由にし、奴隷制の拡大を妨げるために直接的な活動を使用したことを知ること。㉕なぜ John Brown は彼の生存中論争的な人物であったのか、なぜ今日彼は論争的な人物であるのか知ること。

以上がこの授業の目標である。各目標は、Ⅲで考察したレベルや分類で言えば、探究技能目標（I）は「仮説を述べる」レベルに、学習態度目標（A）はこの N. H. U. S. で特にねらいとされている「探究を支える学習態度」に、学習技能目標（L㉔～㉕）は、㉔㉕が「探究技能に関連した学習技能を駆使できる」という第6技能に、㉕が第1技能に、自己概念目標（S）は「能力に対する自信を持つ」第3のレベルに、価値目標（V）は「～についての自分の価値を明らかにする」段階に、それぞれ相当している。そして知識目標（K）は、到達されるべき事実的知識は㉔の形で命題化して、そしてその事実をもとにした事実の解釈は、㉕の形で「なぜ～なのか」と発問を提起して、その答えが開かれたものになるよう配慮がなされている。

これだけの目標が掲げられている45課はどのように展開されていくのかを見ておきたい。

生徒たちに与えられる教材は、次の項目の下にいくつかずつまとめられた原典資料である。その項目（カッコ内は資料数）は、〔8つの伝記〕（8）、〔1850年以前の John Brown〕（3）、〔カンザスにおける John Brown〕（3）、〔John Brown と他の廃止論者たち〕（4）、〔ハーパーのフェリーでの John Brown〕（1）、〔John Brown についての証拠〕（4）、〔John Brown の最後の演説と処刑〕（2）、〔他人が見た John Brown〕（6）、となっている。

これらの資料をもとに、生徒たちを導いて探究を行わせるために教師がする発問として、① John Brown の生活に対する主要な影響は何だったのか？

②彼の人格の特徴のいくつかは何だったのか？

③彼の価値は何だったのか？

④彼の主要な目標は何か？

⑤どのように彼は彼の目標に到達しようとしているか？

⑥どのように彼は支持を増したか？

⑦彼は彼自身を何と考えたか？

⑧異なる準拠枠を持った人々は彼のことを何と考えたか？

が提案されている。問いの1つが、それぞれ1時限の授業の主要な発問となるものと考えられる。そこで、これらの発問を検討してみると、発問①～④では特に学習態度目標が、発問⑤～⑥では価値目標が、発問⑦では学習技能目標の㉠が、発問⑧では学習技能目標の㉡が、特に意識されている。発問全体としては、探究技能目標を達成させようとしている。さらに、学習全体によって、自己概念目標をも達成しようとしている。

〔事例2. 学習態度目標を目指す単元——C. P. S. 単元 I 「比較政治システムへの導入」〕

C. P. S. は、そのコース自体がホルト社会科の導入となっており、6単元11章から成る。そこで、その導入部は、特に重要な役割を持っていると考えられる。

C. P. S. の単元 I 「比較政治システムへの導入」<sup>(64)(65)</sup>は、以下の構成をとる2つの章から成る。1章ストアペンバーグ・キャンプの政治システム

1 課政治的意志決定と制度

2 課意志決定

## 3 課政治文化と市民的資質

## 4 課概念を使用した政治システムの分析：要約のエッセイ

## 2 章原始的で伝統的な政治システム

## 5 課政治的意志決定者と制度：シャイアン

## 6 課意志決定：シャイアン

## 7 課政治文化と市民的資質：シャイアン

## 8 課原始的で伝統的な政治システム：シャイアン

1 章では、比較政治学の概念がストアペンバーグ・キャンプという具体的事例に基づいて生徒たちに紹介される。さらに、2 章ではその概念を適用してシャイアンの事例を分析させることによって、概念を分析の武器（分析的質問）として強化することがはかられる。ここで習得された概念が、米・ソの政治システムを分析する際に活用されていく。

これらの諸課は、1～3 課が第1 目標、4, 6, 7 課が第3 目標に学習態度目標を掲げている。それらは、

- 1-1-1-A 喜んで教科書、ノート、ペンをクラスに持参し、クラスの討論を聞く、
- 1-1-1-B 喜んでノートを取り、求められた時クラス討論に参加する、
- 1-2-1-A (1-1-1-A に同じ)
- 1-2-1-B (1-1-1-B に同じ)
- 1-3-1-A (1-1-1-A に同じ)
- 1-3-1-B (1-1-1-B に同じ)
- 1-4 他人の邪魔をせずに暗くされた部屋の中で有声フィルムストリップを喜んで聞く、
- 2-6 喜んで小集団討論の中に参加し、クラスにこれらの討論の結果を報告する、
- 2-7 クラスの一部として個人的な書き方の練習に参加する、

となっている。

この学習態度目標に示されているものは、Ⅲで考察したレベルでいえば、第1レベル(1-4)や第2レベル(2-6)に相当し、「小集団の形成」を目指すC.P.S.自体にとって、またホルト社会科全体にとって、基礎となるものである。そして、2-7のそれは、やがてS.W.S.で強調される「集団の中での個の育成」へとつながっていく萌芽を示している。

第2レベルのそれを育成する、2章6課「意志決定：シャイアン」の授業は、その展開の大略が指導書によって示されている。すなわち、その授業は、次の如く展開される。

①〔発問〕あなたはこの読み物からシャイアンの間での政治的意志決定についてより一層学習したか?→②〔発問〕政治制度についてはどうか?→③〔小集団作業〕(略)→④〔報告〕それぞれのグループにその発見物を報告させる→⑤〔クラスハンドアウトを配布しそれを読ませる〕生徒たちに、著者たちや人類学者たちは、生徒たちが Stick Everything Under His Belt の事例から引き出したのは別の政治的意志決定者たちについての付加的な情報を与えているかどうか尋ねる→⑥〔任意発問〕生徒たちに、このように働いている政治システムは急速に変化するかどうか尋ねる。

「小集団での学習」は、以上の展開の③と④で行われるが、それはクラスを5つの小集団に分けて実施される。各グループはテキストに示されている質問のなかから各1つを課題とする。それらは、「誰が政治的論争を1つの決定のために持ち出したか?」、「どのように彼らは他の人々に彼を支持させたか?」、「どのようにその決定はなされたのか?」、「どのようにそれらは実施されたのか?」、「シャイアンたちは一般法を作ったか、それとも彼らは特定の事例を過去の同様の事例によって導かれて決定したのか

？」である。

生徒たちは、各グループ共、共通な2つの資料「The Tribe Banishes and Then Welcomes Back Sticks Everything Under His Belt」と資料「Cries Yia Eya Banished for the Murder of Chief Eagle.」および6葉の写真をもとに<sup>68)</sup>、各質問に対する答えを小集団でさがしていくのである。

すなわち、生徒たちが、共通の課題を持って小集団で作業をすることを通じて、知識を獲得するにとどまらず、その小集団での学習を喜びと感ずることを目指しているのである。

### 〔事例3. 探究技能目標を目指す授業〈実験〉——I. B. S. 1章3課「水の魔術の科学的な研究」〕

I. B. S. 1章「行動科学の性質について」の3課「水の魔術の科学的な研究<sup>69)</sup>」は、それに先行する1, 2課で、水の魔術などについて教えられたのち、それらを科学的に研究していくのはどういうことかを教える<sup>70)</sup>。

この課の探究目標は、「明らかに算数ができる馬の詳細な記述を与えられて、その現象に関する科学的なデータをうみだすための一連の実験をデザインできること」<sup>71)</sup>である。

使用される教材はテキストとハンドアウトである。テキストは① Evon Z. Vogt と Ray Hyman の『水の魔術, U. S. A.』からの抜粋「フィールドと実験室における実験」, ②タイヤの実地の使用テストと室内でのテストの写真, ハンドアウト<sup>72)</sup>は同じく『水の魔術, U. S. A.』からとられた「賢いハンス, 超能力馬」である。

授業展開は、まず教材①に対する、「読み物3の中で描写された、よい科学的な実験の性質のいくつかは何ですか?」という問いで始まる。生徒はここで科学的な実験が具備すべき要件を考える。

次に生徒の注意を2葉の写真に向けさせる。そして、その写真に付された、「あなたがこれら2つのテストを行っている技術者の立場だったとして、どのようにあなたはどちらのテストを信ずるべきであると決定するか——フィールドテストか実験室テストか？それぞれのテストの利点と欠点は何か？」という質問に答えることを求められる。ここでは、生徒は2種類のテストのしかたを、その長所と短所とを合わせて知るのである。

さらに生徒たちに、水の魔術のようなことが無いことを確信しているかどうか尋ねる。そして、「科学者たちは水の魔術が偽物であると証明されたと信じていますか？」と問う。これらの問いは、絶対的な正しさを以って、ある事の非実在を証明することはできないという、科学の本質を生徒に把握させようとする。そして、科学の真髄は、その真実が経済的に価値があろうと無かろうと、われわれが物事についての真実に接近するのを助けることにあるのだ、ということを認識させる。

最後の活動では、生徒たちは、ハンドアウトを渡され、実験を計画するように求められる。この活動は、個人の宿題として、あるいは調査研究チームを作って、行わせる。生徒たちはこの活動では、この授業で獲得した実験に関する全ての知識を、1つの事例について実験する計画を立てる活動で使用するによって、いうなれば、シミュレーションの中で習得していくことが考えられている。

〔事例4. 探究技能目標を目指す授業〈世論調査〉——I. B. S. 2章10課

「アメリカ人になること：家族」]

I. B. S. 2章10課「アメリカ人になること：家族」<sup>(9)(10)</sup>は探究技能目標を、「子どもの養育についての情報を収集することをねらいとした質問紙の項目を工夫できること」としている<sup>(11)</sup>。

この課の教材は、「アメリカにおける子どもの養育」という、Ronald



C. Johnson と Gene R. Medinnus の『児童心理学：行動と発達』からの抜粋である。その中には、子どもの養育についての、R. Sunley, Rousseau, Froebel, Watson, Clara M. Davis, A. Davis & R. T. Havighirst, D. R. Miller & G. E. Swanson, Benjamin Spock, などの見解が示されている。また、廊下で学習したり遊んでいる生徒たちの写真がある。

授業の展開はこの写真から始まる。生徒たちは自由な討論をするが、自分の意見を証拠をもって弁護することがここでは求められる。その意見には両親の意見もまた反映されることが予想されている。

次に教師は、生徒たちに、彼らの両親あるいは友人たちの両親の、子どもの養育の実践について情報を収集するための質問紙を開発し調査をしたらどうか、という提案をする。この活動では、生徒たちは、質問紙に載せるための、「何歳であなたはあなたのお子さんにデートすることを許しますか？」など、10から20の質問のリストを作る。そして、「この質問紙の結果を次時にまとめるとして、その質問紙のデータから何が一般化できますか？」という発問をする。これは生徒がこの種の活動から何を学ぶべきかを明確にさせる。さらに、「どのようにあなたが児童養育の仕事にアプローチするかについてこの時点で何か強い意見はありませんか？」と問い、自由討論を行い、疑問点などを無くしておく。

そして最後の活動に至り初めて読み物が与えられる。読み物から、生徒たちは、この複雑な分野では専門家も意見が分かれているのだということを知る。これらの専門家の意見は、やがて質問紙が持ち寄せられた時に、生徒たちがその中に示された両親の意見を分類する1つの手がかりを提供することになる。

〔事例5. 探究技能目標を目指す授業〈付加的な探究の型あるいは政策についての意志決定の型〉——C. P. S. 5単元9章41課「カンボジア：大

統領は決定を下す」]

C. R. S. では、このコースの5単元のみにもみられる独自の探究技能目標がある。これは、Ⅲで考察した3つのプロセスからなる目標であり、C. P. S. 9章41課「カンボジア：大統領は決定を下す」<sup>(9)(10)</sup>においては、次の通りである。

④テキストと絵を与えられて、政府の政策を認識できること。

⑤テキストと絵を与えられて、1つの問題に対する選択的な解決を提案することができること。

⑥1つの問題の提案された解決の論理的帰結を演繹することができること。

この授業の展開は、①〔発問〕「論点を述べる」の中で描写された意志決定プロセスの5段階は何か?→②〔発問〕われわれはこの探究モデルをインドナにおける合衆国の意志決定に使うであろう。誰か喜んでその序から読み物41の背景をスケッチするか?→③〔指示〕このモデルを適用しよう。1970年代後半におけるベトナムの問題は何だったか?214から215頁の絵から始めよう。(生徒たちの約5分の1に5つの挿し絵のうち1つを学習し解釈を準備することを割り当てよ)→④〔報告〕5人の生徒に、彼らの解釈を発表させる→⑤〔指示〕読み物からあるいは一般的な知識からその問題の付加的な次元を求めよ→⑥〔発問〕この問題を解決する選択的なやり方は何か?216から217頁の5枚の絵を参照せよ(小集団学習)→⑦〔報告〕(④に同じ)→⑧〔指示〕(⑤に同じ)→⑨〔発問〕どのように大統領は彼が考えた異なる選択肢について発見したか?→⑩〔指示〕それぞれの選択肢のありうる帰結をよく見出そう→⑪〔発問〕なぜ大統領は米軍をカンボジアに介入させる事を決めたのか?→⑫〔発問〕選択肢の注意深い検討以上の、決定を下すためのよりよい方法はあるか?

生徒にとって、付加的な探究の型(あるいは政策についての意志決定の

型)はこの授業で初めて導入される探究の型である。したがって、型を知識として知ることと、それを実際に使用してみることとの2つが目指される。

活動①～②では、テキストを読むのだが、そこには「政策についての意志決定の型」として、5段階が示されている。それらは、1. 解決されるべき問題を定義する(このプロセスは、その問題を十分に理解すること、どんな目標が到達されるべきかを決定すること、そしてその決定の中に合意された価値を認識すること、を含んでいる)→2. その目標に到達するために、全ての可能なやり方を述べよ→3. そのプロセスの中で非実際的あるいは害があると思われるものを捨てて、それぞれの可能な解決が持つかもしれないあり得る効果を注意深く評価せよ→4. いかなる政策でも完全ではないということを記憶しつつ、ねらわれている目標の大部分を達成するように見える政策を選べ→5. その問題の状況は変化したかどうか、そして意志決定者の目標は同じものにとどまったかどうか理解するために選択を再検討せよ、となっている。そして、これをさらに簡単にしたものが、探究技能目標になっている。

この型に、次の活動③～⑫においては、実際に、2つの資料、統計、表、演説、ポスター、5枚の写真をもとに生徒が探究を行っていくプロセスで使用することを通じて習得していく。すなわち、③～⑦では型のステップの1から3までが絵だけからなされ、1つの仮説的解決法が出される。⑧で付加的に資料を与えられることによって型のステップ2がなされ、多数の解決法が案(ないしは予想)として出される。そして、活動⑨～⑫に移る。⑨は型の1と2、⑩は3、⑪は4、⑫は5にそれぞれ相当している。

以上の如く、この授業では、探究の型が導入され、その型の第1から第3ステップが繰り返し強調されている。付加的な探究の型が初めて紹介されるコースの、最初の授業という位置付けが、この強調点をとることにな

ったのだと考えられる。

〔事例 6. 探究技能目標を目指す単元〈歴史のための探究の型〉——

S. W. S. 8章「市場における経済的成長」〕:

ホルト社会科第1版、第2版を通じて最も重視されている「歴史のための探究の型」は、

1. 資料から1つの問題を明らかにする,
2. 仮説を設定する,
3. 仮論の論理的意味を明らかにする,
4. 資料を集める,
5. 資料の分析, 評価, 解釈を行う,
6. 資料に照らして仮説を評価する,

となっている。ここでは、以下の具体例に即してその小段階にも触れていくことにしたい。

S. W. S. 8章「市場における経済的成長」<sup>693</sup>の34~37課は、「6. 資料に照らして仮説を評価する」段階の探究技能目標を掲げている。34課は「必要であれば仮説を一部修正する」小段階に、35, 36, 37課は「一般化を述べる」小段階に、それぞれ相当している。

このうち、34課<sup>693</sup>を詳しくみると、この課の探究技能目標は、「13世紀、17世紀、および18世紀の文書を与えられて、1つの市場システムを生み出した中世経済の変化についての仮説を正当化し修正するためにデータを使用すること」になっている。

生徒たちは、テキストの中の「農奴は新しい契約をする」、「Toulouseはそのギルドの規則を改訂する」、「Colbert とマルセイユの商人」、「イギリス社会についてのコメント」、「労働と富についての Richard Baxter」、 「国富論」の6つの資料や5枚の絵をもとにして探究をすすめていく。

指導書によれば、この授業は次の如く展開される。①〔発問〕論争点を述べる」によれば、どんな勢力がヨーロッパにおける市場経済の発達を導いたか?→②〔小集団作業〕クラスを6グループに分け、各グループに読み物34の中の1つの文書を割り当てよ。それぞれのグループに次の質問に対して答えさせよ：②-1ヨーロッパにおける変化しつつある経済的態度について何をこの文書は明らかにしているか?②-2いつこれらの変化は起こったか?②-3その文書はあなたが前の諸章の中で形成した何らかの仮説を正当化しているか?②-4それはそれらのいくつかを無効にしているか?②-5それは何か新しい仮説を付加するか?→③〔発問〕これらの変化は、どんな財やサービスが生産されるべきか、どのようにそれらを生産すべきか、そして誰のためにそれらを生産すべきか、についての経済的な決定にどのように影響を与えているか?→④〔指示〕生徒たちに192～193頁の絵に戻らせよ。これらのできごととのどれが市場経済の発達を遅らせたか、それとも発達に貢献したかを決定するために、「論争点を述べる」か Adam Smith の『国富論』のどちらかに含まれた市場経済の定義を使うように求めよ→⑤〔発問〕読み物34の中に提示された証拠は市場経済がヨーロッパで発達したことを示しているか?

この授業展開の中心は、②の小集団作業である。生徒たちは6つのグループに分けられ、各々1つの資料をもとに、②-1から②-5の問いに答えていく中で、前の章の中で立てられた中世経済の変化についての仮説を正当化したり、修正していくのである。

〔事例7. 探究技能目標を目指す単元〈歴史的な時代やトピックあるいは歴史的定義の探究の型〉—— S. W. S. 11章「ナショナリズム」〕

ホルト社会科では、特に歴史学習に適用できる2つの概念の型を、生徒に紹介しようとしている。1つは「歴史的な時代やトピック」であり、

「生徒たちはルネサンスとか中世のような用語の有用さ、そして同じような全体を包括する呼称の危険性について学習する<sup>64)</sup>。もう1つは「歴史的定義」であり、それは歴史のコースを通じて繰り返し学習される。たとえば、「民主主義、封建主義、共産主義、そしてナショナリズムのような語は、時代を通じて、それらの意味を変えてきた。われわれは生徒たちにこれらの語を、それらの一般的意味だけでなく、それらが特定の時代と場所で持っていた意味によって明確化しながら、注意深く用いることを教えている<sup>65)</sup>。

ここでは、「歴史的定義」の指導例を取り上げて考察していくことにする。

S. W. S. 11章「ナショナリズム」<sup>66)67)</sup>は、  
46課 チューダー・ナショナリズム、  
47課 イタリアにおける19世紀のナショナリズム、  
48課 ドイツにおける19世紀のナショナリズム、  
49課 ナショナリズムの擡頭：歴史的なエッセイ、  
の4課から成り立っている。

各課は第1目標(49課は第2)に探究技能目標を掲げている。それらは次の通りである。

46. チューダー朝の文書と国家やナショナリズムを定義する問題を与えられて、16世紀イギリス人民にとってのそのことばの意味について仮説を述べること。

47. 読み物46の中のナショナリズムの定義と19世紀イタリアの文書を与えられて、チューダー・ナショナリズムと19世紀のナショナリズムを比較し、この定義を改訂するために新しい証拠を使うことができること。

48. ナショナリズムの定義を与えられて、何をその諸定義は共通にもっているか、なぜそれらは異なっているかを決定できること。

49. どのように諸国家は人々の忠誠心を命令するようになったかを決定する問題と国家のシンボルを示しているフィルム ストリップを与えられて、その中でナショナリズムがそれ自体を維持していたやり方についての仮説を述べるができること。

この探究技能目標は、「条件+生徒の行動」という形で述べられているので、どのような学習活動が行われているかは、これらの目標だけからでもかなり推測できると思う。

46課では、生徒たちは4グループに分けられ、各グループは、「イングランドは教皇に挑戦する」、「シェークスピアの Sceptred Isle」、「復讐の最終戦」、「ステファン・ゴソンの軽べつ」のうち1つの資料を割り当てられて、「チューダー朝のイングランドで表現されたナショナリズムを、どのようにあなたは定義するか?」といった質問に答えるべく討論をする。そして、その結果、「全事例において国家と王国の領域は1つだったこと、そして人々にとってその王国への忠誠心は彼らのナショナリズムを表わす第一の手段である」といった仮説に達するのである。

47課では、イタリアのナショナリズムについての3つの資料を与えられる。そして小集団学習で、それらの資料の著者の考えが異なっていたか、同じだったかを検討することによって、イタリアのナショナリズムは「外国支配から独立し、全てのイタリア人が彼らの忠誠心を与えることのできる統一的な代表機関を熱望していた」という仮説に到達する。46課の仮説は、この47課の仮説と比較されることによって、改訂されていく。

同様なプロセスが、48課ではドイツのナショナリズムについてもなされ、そこではナショナリズムは「ドイツ人であるとのはっきりした観念とドイツ人の第一の忠誠は1つの統合された国家に対してであった」という仮説が出され、46、47課のそれと合わせて検討される。

そして、48課では、1つのエッセイとフィルム ストリップを与えられ

て、近代においてナショナリズムは「人々の忠誠心を命ずる最も重要な力」であり、諸国がシンボルを用いたことを知る。

生徒たちは以上の学習活動を通じて、「ナショナリズム」という歴史上の概念を教授されることによって、その概念が各時代の背景のもとに成り立っていることを知る。このような概念の理解のさせ方は、生徒たちが他の概念を与えられた時には、それらを批判的に取り扱うこと、それらを各時代に即して正確に把握していく姿勢を培うことを可能ならしめると思われる。

〔事例8. 価値目標を目指す単元——I. B. S. 3章「青年期」〕

価値目標には、「価値を明らかにする」目標と「価値づけ」目標とがある。ここでは、後者の例を取り上げて考察したい。

I. B. S. 3章「青年期」<sup>(40)</sup>では、その価値づけ目標は、次のようになっている。

17. ハイ・スクールの目的に関する自分自身の価値観を明らかにできること。

18. 他人がその人の活動、行動、等々について考えていること、に対して自分が認めるべき重要性に関する自分の価値観を問題にすること。

19. 体育の目的と重要性に関する彼らの態度を検討することを生徒たちに求めること。

20. (19課に同じ)。

21. ㊶結婚の契約を引用することによって結婚の権利と義務に関する彼らの価値を明らかにすることを生徒たちに求めること。㊷もしも彼らが全く自由に1つのものを選べるならば、彼らを選ぶであろう生活様式の種類に関する彼らの価値を明らかにすることを生徒たちに求めること。

17課は「アメリカの青年の一日の生活」というテーマである。生徒たち



は、14歳の少女の日常活動についての例を与えられて、まずその例を自分たちで分析し、その後、その結果を、同じ例について文化人類学者が行なった分析と比較して、評価をしていく。この学習活動で目立つのは、「何が Lila に対するあなたの反応ですか?」、「あなたは彼女のようにになりたいですか?」等々の教師の発問である。この例の如く、「あなたの～は?」という発問は、生徒をして、一般的な価値観ではなく、自分の価値観を明らかにさせていくのである。さらに、それは文化人類学者などの価値観と比較されることにより客観化への契機を与えられる。

次の18課「デートをすることと文化」では、デートに関する文化人類学者の見解、デートのパターンの過去半世紀にわたる変化、が教えられる。この課では、たとえば、「他の人々が本当にあなたのことを何だと考えているかを見つけ出す、何か相当客観的なやり方をあなたは考えることができますか?」といった発問がなされる。それらの発問は、生徒たちに自身自身の価値観自体を俎上に置いて検討することを要求する。

19課「体育と青年」では、学校間のスポーツ競技がとりやめになったらどうするかを小集団で考えた後、スポーツの勝利と学校精神の関係について James Coleman の見解などを検討する。この課では、「あなたはこの提案を支持、拒否、あるいは修正しようとしていますか?」といった発問がなされ、生徒は、自分の態度を検討する。

以上の如く、価値づけ目標の第2のレベルを目指すこの単元では、一般的な価値観と対比したり、検討を加えることによって、自分の価値や態度を明確にさせようとしている。

## V お わ り に

社会科に限らず、授業を行うということは、意図的であると無意図的で

あるとを問わず、そこには目的があるはずである。その目的は、具体的にはその授業の目標として示される。

ホルト社会科第2版の分析から、以下のことが、結論的に言明できる。

1. 社会科の目標は、方向目標（またはスローガン）として示されるのではなく、1つの単元や授業の活動を通じて到達し得るものでなければならない。到達目標の形で目標を提示しておくことは、その授業を、他者が客観的に評価、批判、修正、再試行することを可能にする。

2. 社会科の目標は、これまで、知識、態度、技能、価値などに対する明確な区分がなされずに示されてきた。さらには、知識のみが教えられているかのように見えて、実際は他のことが教え込まれてきた。そこで、社会科の目標は、それぞれの領域について明示しておくべきである。このことによって、知識目標であれば知識の構造論などに基づく批判も可能であるし、価値目標であればコールバーグの尺度<sup>40</sup>などによる検討も可能になる。

3. 社会科の目標は、その全てが同一のプロセスで育成されるものではなく、個々の目標にはその目標固有の育成原理がある。ホルト社会科第2版の6つの目標についてまとめてみると、次のようになる。

①学習態度目標は、シークエンス、コース、単元、授業、それぞれのレベルで重要視され、その構成原理となっている。その質的な深化は、小集団の形成→小集団の中での個の育成→小集団での学習+探究を支える学習態度の育成→個人と個人、個人と小集団、個人とクラスの相互作用の中で学習態度の育成、といったパターンに集約できる。

②自己概念目標は、コース、単元レベルでの構成原理とはなっていない。この目標は、各授業に配置され、シークエンスを通じては、知る、言う→感じる→能力に自信を持つ→個人的意見の重要性を知る、という順序で高められていく。

③価値目標は、大きく2つに分けられる。シークエンス全体を通じての導入部のコースでは、「目標自体が「価値を明らかにする」となっている。これに対して他のコースでは、「価値づけ」となっている。「価値づけ」はさらに、一般的な価値を明らかにし、考え、検討する段階と、自分の価値を明らかにしたり態度を検討する段階とに分かれる。全体として3つのレベルからなるこの目標は、それぞれのコースに相当する目標が、単元や授業授業の目標にまで貫かれ、1つのコースでは1つのレベルの目標をその中の単元や授業で繰り返し習得させようとしている。

④学習技能目標は、シークエンスに伴う深化も顕著ではなく、コースによる特色もない。単元、授業のレベルにおいて他の目標と密接に関連し、それを支えるものとして示される。

⑤探究技能目標は、シークエンスからいえば、一般的探究方法の教授→特殊な探究方法の教授→探究方法の批判的検討→新しい探究方法の提起、といった深化がみられる。コースごとに教授される探究方法は異なる。探究技能目標は、C. P. S. のように授業構成原理となることもあれば、S. W. S. や N. H. U. S. のように単元構成原理となることもある。いずれにしても、探究方法それ自体についての導入的な授業や単元ののち、その探究方法が1セットとして、あるいは部分的に、繰り返し使用されることによって、その目標が達成される。

⑥知識目標は、生徒にとって知識を仮説として教授することに留意されている。しかも、歴史上の事にしても、生徒たちの経験や関心にひきつけて理解させようとしている。

4. 単元や授業の目標は、その単元や授業のねらいを明確にするために、6つの目標全てを示すよりは、そのうちのいくつかのものに焦点化したほうがよい。焦点化することによって、返って、取り上げなかった、あるいは取り上げられなかった項目にも考慮が払われることになる。

〈注〉

- (1) 森分孝治「科学的社會認識の系統的育成」(『社会科教育論叢』第××集, 1973 PP.58~79)を参照。
- (2) Edwin Fenton が中心になって, Carnegie-Mellon 大学で開発。Holt Rinehart and Winston, Inc. より1967年から1969年にかけて第1版が, 1973年から1975年にかけて第2版が出版された。第1版については, ①拙稿「アメリカ新社会科における歴史の教授法——E. フェントンの場合——」(『社会科研究』第23号, 1974), ②拙稿「アメリカ新社会科における歴史の教材構成」(中国四国教育学会『教育学研究紀要』第20巻, 1975), および③拙稿「『ホルト社会科カリキュラム』における歴史の探究学習」(『探究的歴史学習の指導——その構造と実践——』中教出版, 1975)などを参照。
- (3) E. Fenton, *A RATIONALE For the Second Edition of the Holt Social Studies Curriculum*, Holt Rinehart and Winston, Inc. (以下 Holt. と略記)。1971. p.3.
- (4) *Ibid.* (3), p.4.
- (5) *Ibid.* (3), p.4.
- (6) *Ibid.* (3), pp.4-5.
- (7) *Ibid.* (3), p.8.
- (8) *Ibid.* (3), pp.2-3.
- (9) E. Fenton, A.N.Penna & M. Schultz, *Comparative Political System : An Inquiry Approach*, Holt., 1973.
- (10) E. Fenton, A.N. Penna & M. Schultz, *Teacher's Guide for Comparative Political Systems : An Inquiry Approach*, Holt., 1973.
- (11) E. Fenton & J.M.Good, *The Shaping of Western Society : An Inquiry Approach*, Holt., 1974.
- (12) E. Fenton, J.M. Good, L.W. Rosenzweig & G.P.Gregory, *Teacher's Guide for The Shaping of Western Society : An Inquiry Approach*, Holt., 1974.
- (13) I. Bartlett, E. Fenton, D. Fowler & S. Mandelbaum, *A New History of the United States : An Inquiry Approach*, Holt., 1975.
- (14) B. Judo, *Teacher's Guide for A New History of the United States : An Inquiry Approach*, Holt, 1975.
- (15) J.H. Sandberg, *Introduction to the Behavioral Sciences : An Inquiry Approach*, Holt., 1975.
- (16) J.H. Sandberg, *Teacher's Guide for Introduction to the Behavioral Sciences : An inquiry Approach*, Holt., 1975.

- (17) 拙稿, 前出(2)の②および③を参照。
- (18) *Ibid.* (13), pp.289-315.
- (19) *Ibid.* (14), pp.72-73.
- (20) *Ibid.* (9), pp.1-42.
- (21) *Ibid.* (10), pp.2-17.
- (22) *Ibid.* (10), pp.12-13.
- (23) *Ibid.* (9), pp.27-34.
- (24) *Ibid.* (15), pp.13-16.
- (25) *Ibid.* (16), pp.6-7.
- (26) 文化人類学に呼応した社会科の内容として魔術を取り上げて論じたものとしては, R. G. ハンヴェイ「社会科, 教育的文化, 国家」(E. A. アイスナー編著, 木原健太郎・加藤幸次・高野尚好訳『カリキュラム改革の争点』黎明書房, 1974) pp.214-215 を参照。
- (27) *Ibid.* (16), p.114.
- (28) *Ibid.* (15), pp.53-59.
- (29) *Ibid.* (16), pp.20-21.
- (30) この授業の第1目標ではない。
- (31) *Ibid.* (9), pp.207-217.
- (32) *Ibid.* (10), pp.76-77.
- (33) *Ibid.* (11), pp.187-209.
- (34) *Ibid.* (12), pp.70-77.
- (35) *Ibid.* (11), pp.187-195.
- (36) *Ibid.* (12), pp.70-71.
- (37) *Ibid.* (3), p.18.
- (38) *Ibid.* (3), p.18.
- (39) *Ibid.* (11), pp.258-281.
- (40) *Ibid.* (12), pp.94-101.
- (41) *Ibid.* (13), pp.88-133.
- (42) *Ibid.* (16), pp.30-45.
- (43) *Ibid.* (3), pp.6-7; E. Fenton, "Moral Education : The Research Findings" *Social Education*, Vol.40, No.4, April 1976, p.189; 邦訳された紹介としては, グッドラッド他著, 伊東博訳『人間中心の教育を求めて——カリフォルニア大学附属小学校の実践』(誠信書房, 1977) pp.75~79, を参照。